

せなかむし

発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第十二号（毎月一日発行）
平成二年九月一日

古平烽火所異説

下 吉川 義雄

こうなると、丸山の頂上に烽火所を設けることは場所としては格好の所だが、二百年前の事情を想像していただければわかる

と思うが、古平場所の中心はチヨベタンの本陣付近であり、ピクニを経由してヲカムイ崎の烽火所まで信号を送っても、ウラ積丹には全く届くことはない。

烽火は、ヲカムイ崎から始まって岬から岬に信号を送り余市まで届けられ、「此辺よりイワナイへ越行道あり」というような順序であったと思われる。

そうなると、丸山のテッペンで烽火をあげると遥か遠くまで信号を送れる利点はあるが、頂上に前記の番屋があり、常駐の番人が居て外国船来航の判断を

し、そして、烽火台に火をつけるといった一連の業務が出来たであろうという疑問が出る。

少なくとも天明年間（一七八四）以後でなければ、和人の土着は勿論のこと越年すら禁止されていたのである。アイヌの人達は岡田家の手足となつて働いてはいたが、丸山の頂上で春夏秋冬、吹雪の日も嵐の日も番をすることが出来るであろうか。

結論からいうと、丸山烽火所は山頂ではなく、丸山岬にあつたとする考えの方が理にかなつている。チヨベタンの本陣から出る指示は、丸山岬までなら山頂とは比較にならないほど早く着く。

烽火台の数は少なくとも三台

は同じ場所に必要で、ヨイチ方面に向かつて並列して設けられる場所といえは丸山岬をおいて無い。

寛政九年（一七九七）、高橋壮四郎著『松前東西地理』に次の記述がある。

「○マルヤマ崎 当所烽火アリ、盛根三間（五・四）四方、高サ一丈（三・三）此処小ワシリアリ、コロタ浜、山近ク木処々ニアリ」

規模の大きな烽火台が丸山岬に設けられている確たる文証であり、丸山の山頂に烽火所があつた記録は残念ながらお目にかかつたことが無い。

戦後、丸山の頂上に烽火台があつたとする説を熱心に唱えていた人は、皆松勇助氏である。

私は氏の説を立証すべく、何回も山頂を歩き廻り、そして堀り返してもみた。その結果、『町史ふるびら』に記述するのを中止した。

緑濃いピラミットを想わせる丸山は実に美しい。練場で無我夢中の時が落ち着く頃、ふと丸

山を見上げると、新緑の中に満山山桜が咲き競つているのを感じの目で見たことを思い出す。

丸山の嶺に、烽火台があつてもそれはそれでよいのではないかとも思う。少なくともロマンあふれる話を、愛する丸山に伝説として残してあげられるからだ。

——終——

△7月の山山来市

■町内の家庭婦人を対象として古平婦人会が結成される

■浜町で腸チブスが発生、三十人の罹患者が出る（四年）

■小学校が練不漁のため運動会を秋に延期する（五年）

■入船町種田干場で自転車競走が行われる（九年）

■余市・古平間航路に新造の蛟龍丸が就航する（十一年）

故郷を想う

福井 幸三

私の記憶する古平のスポーツ
今昔を、不正確を承知で述べて
みたいと思います。

なにしろ大正・昭和・平成と
大変な時間帯なので、お断りし
ておきますが、お茶飲み話し
もするようには思い出し思い出し
述べてみます。

私の小さい頃、春は鯀で学校
も臨時休業になり、みんな働け
る者はモッコしよいで今でいう
アルバイト。私でも一日働いて
モッコで三、四杯の鯀をもら
った。賃金は現物給与でその方
が割りが良かった。片手に握り
飯、片手でたくあんを食べなが
ら大人といつしよに働いた。子
供でも三、四日と続くと肩が痛
くて決して楽ではなかった。で
もそれが普通の事であった。モ
ッコしよいが終わると、鯀さき
(さいいた鯀を組んである丸太に
掛け役)の出面で何週間も働い

いた。その後は、塩敷の子の皮
むき—今の更科さんのおじい
ちゃんに「良く働く」とおだて
られて一生懸命やった。ほめら
れると気分良くしてほんとうに
がんばった—これも苦労だ
なんて思わない。普通の子供は誰
でもやっていた事である。

残念ながら使ったお金が
いくらで、どう使ったかは全く
記憶にない。きっと母親が生活
のたしにしたんだと思う。

当時、古平の広場という広場
は、鯀の粕を干すむしろでいっ
ぱいだった。しかし、これも夏
になると自転車競走の場所に
変わった。勿論、青年ばかりでや
るので華やかなものだった。競

一豆 焼 ぎ

吉凶占いの一つにへ豆焼
き行事がある。

二月の節分の日、いろいろ
を前にあぐらをかいた親父
さんが、いろいろの灰をなら
して地方別・部落別に豆を
並べ、火でしぜんに焼けて

起 縁 場 焼

技用の細いリユーム、サードル
の下がった自転車で、場所は今
の本陣の干場であったり、昔の
中島グランドだったり、余市
や岩内方面からも参加してたよ
うだった。家の近所からも、
の三郎さんとか、中野仁三郎さ
んなどの名選手がいて頑張っ
ていた。北電の水木さんも参加し
ていた。余市では、和田さん、
島田さんなどの独特なユニホー
ム姿も鮮やかで、それはそれは
大変なイベントだった。

柳の枝にどっさりお金の入っ
たキンチャクが吊されていて、
子供心にも「すごい賞金だ！」
と思った。

— つづく —

いくその様子を見て、どこそこ
は大漁だと判断する。

親父のまねをした、子ども
の豆がはじけでもしようもの
なら、

「この野郎！ 千石場所を
ワヤにしたでァー」
と言って、親父からポカリと
やられる。

- 戦争のため自家用車のガソリン使用禁止になる(十六年)
- 国民体力法により乳幼児の体力検査が行われた(十七年)
- 拓銀古平支店が新地町に開設 支店長 斎藤重信(十九年)
- 八雲飛行場建設のため勤労挺身隊が結成される(同年)
- 古平小学校を会場に児童一般市民を対象にラジオ体操講習会が開かれる(二十年)
- 中断していた余市・古平間にバスが二往復する(二十一年)
- 余市・古平間の海岸道路建設に着工する(二十三年)
- 漁業制度の改革により新旧漁業権の切り替え(二十六年)
- 禅源寺に建立した野村泊月句碑の除幕式を行う(二十七年)
- 沖小学校(現・沖町公民館)落成式が行われる(二十八年)
- HBCラジオ「録音風物誌」で古平を紹介する(二十九年)
- 古平川治水記念碑の除幕式が行われる(三十年)
- 古平地方鞍馬競技大会が中島グランドで行われ、馬券も売られた(同年)

戦後の改革による大きな特色のひとつは、婦人の積極的な社会活動への参画にある。地域における婦人活動の原点

とも言える、婦人会の結成にいたるその間の経緯、その後の活動の様子を、ご紹介したい。いっそうの活動と発展を期待して――。

四人の語らい

それは、昭和二十六年でした。古平名物の盆踊りも終わって、朝夕の涼しさがめっきり身にしみるようになって九月始めのある日のことです。今は亡き、広谷ハルさん、岩間ヨシさん、皆松タカさんが、私宅の茶の間にお見えになりました。

お三人のお話は、この西部方面に婦人会をつくりたいので、ぜひその会に参加して、地域の

戦後の婦人会誕生 みなと婦人会

幸せと婦人の生活の向上のために、協力してほしいとお誘いでした。

婦人会の誕生の夜

それまで全然社会的なことに無関心で、子どもの養育のみに心をうばわれていた私でしたが、この時から私の社会参加が始まったとでも申せましょうか。

そして、この夜がのちの『みなと婦人会』の生まれた時、と申してよいかと思えます。

結成式への向けて

会員を勧誘すること、会則の原案づくり、結成式の諸準備など、すべてのがさきのお三方のご尽力によるものと思えます。

ところが折悪しく、西部方面はあの大火のあとでしたので適当な集会所も無く、消防番屋の二階が会場でした。五十人ぐら

いの仲間が集まり、来賓をお迎えして結成式をあげ、このグループが発足したのです。役員が次のように選出され、

- 会長 山口 浪
- 副会長 岩間 ヨシ
- 同 皆松 タカ

「地域における婦人の教養を高め、協力和親睦を図って、地域の良心となる」ことを目的として、毎月の二十日を常会とするという約束が決まりました。

『みなと婦人会』と△命名

第一回の常会の時、会の名前をつけることになりました。「西部婦人会」や「みなと婦人会」などいろいろな名前が出ましたが、投票の結果は一票差で、平がなの「みなと婦人会」に決まったのをおぼえております。

会費は月十円、会員数は百人を越えておりました。

次号へつづく――
昭和四十五年五月 『みなと婦人会二十年の歩み』より
会長 山口 浪

■本間正敏、山田幸正（当時古中二年）の二人が山で行方不明、町を挙げて捜索したが、十月に遺体で発見（同年）

■外地引揚者連盟古平支部発足 支部長 高橋民蔵（三一年）

■消防に功労のあった佐藤伝作の墓碑を建立し、消防団が供養をする（三五年）

■NHKラジオで「古平町ソラン節発祥について」の談話が放送される（三六年）

■古平高等学校が旧新地分校跡に移転し、創立十五周年記念式典と独立校舎移転祝賀会が行われる（三八年）

■古平小学校校舎新築落成式と引き続き町内旗行列が行われる（三九年）

■札幌で開かれた全道漁民大会の一行千三百人が漁港視察のため来町する（四一年）

■古平町公民館（現文化会館）建設期成会の設立総会が開かれる（四二年）

■古平町開基百年記念式典と祝賀会が開かれ、各種の記念協賛行事が行われる（四三年）

役場職員もハチゴウウに乗って鯨すくい

この本陣の浜はよく鯨の寄る所で、昔、鯨がくきて大漁だったころは、二日も三日も鯨が動かないでいましたよ。大漁だと学校は休みになるし、役場も休みでした。ある時なんか、役場の人たちが空のハチゴウウに乗って、たもて鯨をすくっているのを見たこともあったし――。

私は、学校をおえるとすぐに

昭和初期 まぼろしの唄

《鯨の古平》

古平には、良く知られている『ソーラン節』のほかに、近く全国大会が開かれる『たらつり節』。開基八十五周年を記念してつくられ、今も毎朝、小学校からメロデーが流れてくる『古平小唄』などがあるが、『鯨の古平』という唄のあることは全く知られていない。

この唄は、たぶん昭和初期と思われるが、古平町役場が「古平町鯨漁十態」という、十枚一

港町の大松岡という質屋に奉公

したけど、港町の裏山に広いらんご畑をもっていました。収穫したりんごは、男衆が担いで本陣の浜まで運んだものです。余市からりんご買いの舟が来ていたし、大きな船も来て、樺太やロシアにまで行ったそうです。盛んだったんですね。

(浜田ハナヨさんの談話から)

組の絵はがきをつくったその袋に印刷されている。

町内に居られる当時を知る人たちも、「聞いたことがない」という。するとこれは、歌詞だけは出来たが、作曲されないままに、宣伝用の印刷物に利用されたのだろうか。そのうち鯨にも見放され、いまさら歌う気にもならなくなり、結局、歌詞だけが残った――？
しかし、鯨大漁で繁栄したころの古平の情景を伝える、これも貴重な文化財であるので、四番まで書かれてある歌詞を次に紹介する。

鯨の古平

一、月もおぼろの丸山岬

暁けりや舟べり鱗に光る

一夜万石 心が躍る

やれどっこいしょ

二、暁けりや鯨のなア鱗が光る

古平娘に頬紅いらぬ

モッコ背負えば日に染まる

若い南部衆に心が躍る

やれどっこいしょ

三、今日も沖あげきりきり

鯨背負いばなア日に染まる

しゃんせ

大漁手拭いに旭がやどる

舟のゆききにかもめが躍る

やれどっこいしょ

四、大漁旗にもなア旭がやどる

広い干場も恋ゆえ狭い

皆に知られて心がくもる

乾く粕から陽炎が躍る

やれどっこいしょ

唄にはやされなア

心がくもる



■ 中断されていた古平町民運動

会が「古平住民運動会」と名称を変え行われた(四八年)

■ 一般郵便物の日曜配達を休止

になる (四九年)

■ 堀藤次郎が海上保安庁長官より、北海道第五号の海上保安

協力量を受ける (同年)

◆ ◆ ◆

古平のこと

◆ ◆ ◆

昔語りをする

と、必ず鯨が

出てきます。これは、鯨をはな

れては現在の古平がないという

ことです。それなのに残された

ものが余りにも少ない。火災な

どで失われたものも多いのです

が、町外に流出していくのがさ

びしい。また、昭和の初めごろ

の文書が以外と少なく、実態を

知る確証に乏しいのが町史編さ

んの実情です。たとえどのよう

なものでも、手元にありましたら

見せていただきたいのです。

観音滝に祭られた三十三体の

仏像の寄進者名も、おかげで調

べがつかまりました。